喧嘩

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喧嘩

【Ｎコード】
Ｎ０５９５Ｈ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
些細なことで喧嘩をした良美と美奈。その喧嘩はとんでもないものでクラスの皆は何とか二人を仲直りさせようとするが。学園恋愛コメディーです。主役はクラスメイト達です。

第一章

喧嘩

そのはじまりは本当に些細なものだった。
「何よ、そっちが悪いんでしょう！？」
「悪いのはそっちだろう！？」
二人は教室で向かい合って言い争っていた。押したの押さなかっただの、そんなやり取りになっていた。
「あんたがあの時ああ言ったからこうなったんでしょう！？」
「そっちがあそこでああやったからだろう！？」
そんなやり取りである。取り立ててあれこれ言うようなものではない。周りから見れば本当にいつものことだった。
「やれやれ、またあの二人なのね」
「飽きもせずまあ」
そんな二人を呆れつつも温かい目で見つつ言うのだった。
「あれだけよくよくいつも喧嘩できるよ」
「何が楽しいのやら」
「まあ喧嘩する程っていうしね」
そしてこんなことも言うのだった。
「またすぐに仲直りするさ」
「そうね。またね」
皆そう思っていた。だからこそこの時は何もしなかった。ところが次の日。皆すぐにその異変に気付いたのだった。
「あれっ、あんただけ！？」
「そうよ」
天道美奈は不機嫌な顔で皆の声に応えた。
「それがどうかしたの？」
「どうかしたのかって」
「ほら、あの」

「あいつは？」
皆戸惑いながらも彼女に言う。
「ほら、山崎君」
「あいつは何処なんだよ」
「さあ」
しかし美奈は不機嫌なままでいるだけだった。その小柄でショートにした髪が揺れる。それと共に大きなはっきりとした黒い目が不機嫌そうに閉じられる。よく見れば可愛い顔をしている。唇はとても小さく鼻だちもいい。実に女の子らしい顔をしていると言えた。
「何処かにいるでしょ。死んでるかも知れないけれど」
「死んでるかもって」
「これってまずいよな」
「ええ。確実にまずいわ」
皆彼女の態度に不安に満ちた顔で言葉を交えさせる。
「この流れはね」
「洒落にならないぜ、おい」
「とりあえずはよ」
クラスメイトは慌てて狼狽しながらもそれでも言い合う。
「あいつが来てからな」
「そうね、山崎君」
「あいつが来てからだよ」
こう言い合ってとりあえずはもう一方を待つのだった。暫くして教室の後ろの扉から黒い髪をおさげにした背の高いすらりとした少年がやって来た。眉は思いきりしかんでいてこれまたはっきりとした大きな目もそれに合わせていてそのうえで教室の中に入ってきたのだった。
「よお、おはよう」
「おじゃようってよ」
「おはようよ」
間違えた一人にすぐに突込みが入る。しかしこれで和らぐような

やわな雰囲気ではなかった。
「まあとにかくよ。こりゃ山崎君もね」
「同じだな」
「予想はしてたけれど」
実はもう何人かはこの有様を予想していたのだった。
「それでも。困ったわね」
「両方かよ」
「いつもは朝になったらもう仲直りしてるのに」
「何でなの？」
皆で困り果てた顔で言うしかなかった。
「まだ喧嘩が続いてるなんて」
「想定の範囲外よね」
「全くよ」
「で、どうする？」
一人が憮然と美奈の横の席に座ったその少年山崎良美を見てまた言う。二人は一瞬目が合ったがすぐに顔を背け合う。右に左に完全に百八十度になってしまっている。
「あの二人がああだとよ。こっちも気が気でないぜ」
「いつも仲いいから余計にね」
「ああ、困る」
結論はこれであった。クラスの誰かと誰かが仲が悪いとそれだけでクラスの雰囲気全体が悪くなってしまう。とりわけ普段は仲のいい者同士がそうなると余計になのだ。
「で、どうするかだけれど」
「誰か考えある？」
「って言われても」
皆クラスの端に集まってそこでひそひそと話をする。普通に席に座っているのはその良美と美奈だけだが二人の首は相変わらずの角度であった。
「こんなことなかったから」

「ねえ」
「いつも朝になったら戻ってたからな」
だから皆昨日は笑ってられたのだ。しかし今日は違っていた。
「とりあえず仲直りしてもらうか」
「そうね」
「それしかないわね」
とりあえずはこれであった。
「何はともあれそうしてもらわないと」
「あの緊張状態がずっとなんてな」
「もう耐えられないんだけれど、今の時点で」
二人の間には剣呑極まるオーラが発散されていた。それはクラス中に満ち今にも爆発しそうである。皆そのオーラを感じて震えているのである。

第二章

「あれが爆発したらどうなると思う？」
「取っ組み合いの喧嘩？」
二人をちらちら見ながら話していく。
「やっぱり」
「それで済むか？もっと酷いことになるんじゃないのか？」
しかしここで男子の一人が言った。
「この状態で爆発するともう」
「否定できないわねえ」
「だよなあ」
そしてその可能性を誰も否定できなかった。
「この状態って。もう」
「今にもだから。本当に」
「だから余計に何とかしないと」
あらためて言い合う。しかし答えは中々出なかった。
「とにかくよ。ここはよ」
「どうするんだ？」
女子の一人の言葉に皆が寄る。
「握手してもらいましょう」
彼女は思いついたように言うのだった。
「二人にね」
「何はともあれ手を握ってもらってってわけね」
「そういうこと」
思いつきのようだがその表情は必死なものであった。
「そうすれば元に戻るんじゃない？いつもあんだけいちゃいちゃしてるんだし」
「そうだよな。確かにな」
「それだといけるかも」

皆それに賛成して頷いた。
「じゃあそれでいきましょう」
「上手くいく筈だな、それで」
「そうね」
皆とりあえずはそれで行くことにした。そうして相変わらず顔を背け合っている二人に近寄りその手をそれぞれそっと持って握らせようとするが。
ここで二人は同時に動いた。そう、同時だった。
何と皆が持って握らせようとしたところでそれぞれの手を思いきり振り回してきたのだ。そのあまりにも凄まじい速さと威力の前に皆は吹き飛ばされてしまった。つまり握手は何があっても嫌だということだった。
「な、何てパワーなの！？」
「化け物！？」
吹き飛ばされた皆はまずはそのパワーに唖然となってしまった。
「皆が吹き飛ばされるなんて」
「しかもそれだけ嫌なの」
「握手さえも」
ここであらためて両者の今の対立の深さを知るのだった。
「こりゃ生半可なものじゃ駄目ね」
「そうね」
そうしてまた教室の隅に集まって二人をちらちらと見ながら小さくなって話をするのだった。
「オーラはさらに強く剣呑なものになってるし」
「もう魔闘気みたいじゃない」
二人から発せられるオーラはまさにその域にまでなっていた。
「どうしようかしら、これって」
「そもそも。何でなんだ？」
男子生徒の一人が腕を組みながら述べてきた。
「何であの二人今あんなに仲が悪いんだ？」

「昨日の続きじゃないの？」
女子の一人がここで言う。
「それでじゃないの？」
「それであそこまで魔闘気を撒き散らすのか？お互い」
「そこまではわからないけれど」
流石にこの娘もそこまでは答えられない。
「けれど理由それ以外にないでしょ」
「まあな」
それもその通りだった。何しろ昨日教室の中で喧嘩していたことはもう皆知っていることである。それが理由と考える方が自然であった。
「それはそうだけれどな」
「だからでしょ。だから今あんなふうになってるのよ」
「参ったな」
そしてここでまた言うのだった。
「こりゃな。どうしたらいいかな」
「とりあえず。何とかしないと」
「駄目だぜ、ありゃ」
既に答えは出ているのだった。仲を取り持つしかない。
しかしそれと共にそれが極めて困難なこともわかっていた。何しろ皆今さっき握手させようとして吹き飛ばされたばかりであるからだ。
「よし、それならな」
「秘策があるの？」
「これだよこれ」
男子の一人はここで何処からともなくケーキを取り出してきた。見事なチョコレートケーキである。上のチョコレートのラッピングもまた実にいい。
「これ食ってもらうってのどうだ？」
「ケーキを？」

「あの二人の大好物だったよな」
「ええ」
「確かにね」
皆このことも知っていた。ケーキは二人共よく食べている。大好物なのである。
「これを二人同時に食べてもらってな。それでどうだ？」
「大好物を食べて雰囲気をよくしながらってことね」
「ああ。それで仲直りしてもらう」
彼の考えた秘策とはこれであった。
「これでどうだよ、これで」
「悪くないかもな」
男子生徒の一人がそれに頷いてきた。
「少なくともやってみる価値はあるな」
「そうだろ？だったらすぐにな」
「よし、やりましょう」
「思い立ったが吉日よ」
こうして皆はまた二人のところに向かう。そうして相変わらず顔を背け合っている二人の前にそれぞれケーキを差し出すのだった。
「何だよそれ」
「何よそれ」
良美も美奈もまずはむっとした顔と声で皆に応えた。
「いきなり出て来たけれどよ」
「どうしたのよ」
「ほらほら、ケーキよケーキ」
「実はよ、さっき貰ったんだけれどよ、喫茶店でな」
この学校には喫茶店もあるのである。そこのケーキというわけだ。
「これ、どうかなって思ってな」
「ほら、美奈の好物じゃない」
男は良美の、女は美奈の周りに集まりながらさりげなくではなく露骨に態度に出して話している。

第三章

「だからどうかなって思ってな」
「食べる？ほら」
ここで皆はケーキだけでなく紅茶も出してきた。
「紅茶もあるしな」
「どう？遠慮はいらないわよ」
「ふうん。それだったらよ」
「それじゃあ」
とりあえず二人はそのケーキを手に取って食べはじめる。皆の目論みはまずは成功した。
ケーキは一個だけでなくまだ出す。幾らでも食べさせてそれで機嫌をなおさせる腹なのである。そうやってケーキを食べさせて紅茶を飲ませて機嫌が随分なおってきたと見たところでだ。
「よしっ」
「今ね」
ここで皆顔を見合わせて目で合図をする。
「席をな」
「やるわよっ」
また目で合図をしてそのうえで二人の席を動かした。それぞれ九十度に動かす。それによりそっぽを向き合っている状態からケーキのある本来の正面に向いていた二人を向かい逢わさせたのである。
ところが。
今回もであった。またしても失敗であった。
二人は顔を見合わせるより前に再び顔を背けてしまったのだった。良美は左に、美奈は右にそれぞれ顔をやって。それでかわしてしまったのであった。
結果としてこれで同じであった。結局ケーキ作戦も失敗に終わったのであった。

皆はこれには唖然となった。席を戻すのもそのままで再び作戦会議に入った。そうしてまた教室の端においてあれこれと話すのだった。
「今度はどうする？」
「どうするって言われても」
「どうしようかしら」
話し合ってもどうしていいかわからない。そのわからないうちにだった。
一時間目のチャイムが鳴った。そうして先生が入って来た。そして二人を見て言うのだった。
「あの二人は何があったんだ？」
「まあそれはまあ」
「ちょっと。色々あったみたいですけれど」
皆も返答に実に困っていた。
「ああしたことになっちゃって」
「気にしないで下さい」
「気にしないでいられると思うか？」
先生は皆に対してその顔を背け合ったままの二人を見ながら言う。二人は教室で向かい合わせになったままでそれぞれ首を背け合ったままでいた。とにかく滅茶苦茶険悪なムードが漂い続けている。
「あれで」
「そこを何とか」
「授業してもらえば」
「御前等随分強引じゃないか？」
先生はそんな彼等の言葉を聞いてまた述べた。
「教室に爆弾があって平常心で授業ができるのか」
「とりあえず爆発はしないんで」
「そこは何とか」
「爆発はしないのか」
「多分そうだと思います」

「今のところは」
返答は実に曖昧なものであった。
「だからどうぞ」
「授業を」
「ああ、わかった」
先生もここで遂に諦めるのだった。
「じゃあ授業やるぞ。いいな」
「はい」
とりあえずは授業は行われた。甚だ不自然であるがそれでもだった。そうしてとりあえず授業が終わるとクラスの面々はまた話をするのだった。
「どうしよう」
「っていってもねえ」
「ケーキも駄目だったし」
「だよなあ」
あいも変わらずそっぽを向き合ったままの二人をちらちらと見ながら言い合うのだった。
「あとは何があるかな」
「何か遊びに入れる？」
「遊び？」
「とりあえずこれとか」
一人がトランプを出してきた。
「するか？ポーカーとかよ」
「あの二人入れてかよ」
「とりあえず仲が悪くても何かポーカーとかしてたら結構和気藹々ってしてくるからよ」
「まあそうね」
女の子の一人がその案に賛成してきた。
「とりあえずはね。喧嘩しててもポーカーとかだったら」
「それだったらあれじゃない？大富豪の方がよくない？」

また別の女の子が言ってきた。
「ポーカーよりも」
「そうかもな。確かにな」
「それかババ抜きか」
それの案も出るのだった。
「まあとりあえずトランプに入れてみるか」
「そうね」
こうして今度はトランプに入れてみることにした。皆早速またしてもかなり白々しいがさりげなくを装って二人のところに来た。そうしてこれまた果てしなく白々しい顔と声で二人に対して笑顔を作って言うのだった。

第四章

「ねえ、ババ抜きしない？」
「お金かけないで」
「ババ抜き？」
まずは美奈が反応してきたのだった。
「それをしようっていうのね」
「そうよ。どう？ババ抜き」
「皆でさ」
「いいんじゃね？」
まずは良美が言った。
「やるんだったら」
「そうね」
そして美奈も言う。しかし二人の顔は背け合ったままだった。
「ババ抜き好きだし」
「そう。だったらね」
「やろうぜ」
皆二人が参加すると言ったのでまずはほっとした。そうしてそのうえでそのババ抜きをはじめる。二人は向かい合ったままだがそれでも顔は背け合ったままだ。そのせいでその魔闘きを思わせる圧倒的なオーラはそのままだった。皆それに耐えながらトランプを引いていく。
「うわ、俺がドベかよ」
「御愁傷様」
「残念だったわね」
男子生徒の一人が自分のところに最後に残ったそのジョーカーを見て思わず声をあげた。
「まあ次があるから」
「そうそう」

「ちぇっ、まあいいか」
とりあえず作り笑いで述べるのだった。
「じゃあまたやるか」
「ああ、またな」
「気が済むまで何度もね」
「それでいいよな」
皆はわざと明るく振舞いながら良美と美奈に顔を向けて問うた。
「またやるよな。また」
「どう？」
「ええ、やりましょう」
「俺もそれでな」
二人は憮然としたままであったがそれでも答えることは答えるのだった。そうしてまたババ抜きをするがそれでも圧倒的な負のオーラはそのままだった。そうして。
結局休み時間は終わりまた授業になってそれからまた休み時間になってババ抜きをしてそうしてまた授業になってそれから休み時間に入ってババ抜きをする。そんなこんなで昼休みになったが二人の仲はずっとそのままであった。
「何か全然よくなってねえじゃねえか」
「どうしようかしら」
皆は今度は学校の食堂でそれぞれのメニューを食べながら話す。弁当を持って来ている面々やパンを買っている面々は立ったり座り込んだりしてそこにいる。そうして食堂ではそこのそれぞれ左斜め下と右斜め上の席にいて食べている二人をそれぞれ見ながら話していた。
「このまま一日過ぎたら」
「っていうか今日だけじゃなくてずっとだったら？」
「ずっとっておい」
女の子の一人の言葉に皆は顔を青くさせた。
「こんな冷戦がずっと続くなんて洒落にならねえぞおい」

「っていうか最悪じゃねえか」
「そうよ、そう」
皆その青くなった顔でそれぞれ言う。言いながらも箸や手は止まらない。
「そんなことが続いたら」
「どうなるのよ、本当に」
「とりあえず食い終わったらまたトランプやるか」
「もう効果ないんじゃないの？」
「けれどそれしかないだろ」
中々絶望的なやり取りになっていた。

第五章

「もうこうなったらな」
「何か寒い話ね」
「だよな」
「しかし。放課後になったら」
だがここでそのトランプの続行を言い出した彼は強い声になった。
「秘策がある」
「秘策？」
「ああ、二人を時間差で校舎の屋上に押し込んでやる」
彼の考え出した秘策とはそれであった。
「とりあえず二人きりになったら何とかなるかも知れないからな」
「知れないなのね」
「ああ、知れないだけれどな」
実際はかなり寒いままであった。しかしそれでもだった。
「それやってみるぞ。いいか？」
「とりあえずもう何でもやってみる？」
「そうよね」
女の子達は顔を顰めながらもそれに納得しだした。
「もうね。こんな状況が続くよりはね」
「やらないより何かやった方がましだからね」
「だよな」
「ひょっとしたら成功するかもだからな」
そして男組もそれに賛成しだしてきた。
「それに賭けてな」
「一か八かな」
「じゃあやってみるか」
最後に言いだしっぺがまとめにかかった。
「それでな」

「ああ、放課後な」
「やってみましょう、押し込み」
こうしてとりあえずはやることが決まったのだった。希望は殆どなかったが。
「とりあえずね」
「一か八か」
かなりやけっぱちになっていたがそれでもやってみることにした。そして何の進展もないまま放課後になった。その放課後に彼等はまた動くのだった。
「じゃあまずはだ」
「ええ」
「私達よね」
女組が男組に対して頷く。
「私達が屋上に美奈を案内して」
「それからあんた達がね」
「ああ、良美の奴を入れるからな」
「それで行くぞ」
「わかったわ」
女組は男組の言葉に対して強い言葉で応えた。
「じゃあそういうことでね」
「お互い上手くやりましょう」
「さて、と。それじゃあだ」
二人はそっぽを向き合ったまま帰り支度をしていた。最初に女組が動き美奈に声をかけに行く。男組は男組で自分達の作戦を実行させる場所に向かった。
女組は何気なくを装って。そのうえで美奈に声をかけた。
「ねえ美奈」
「ちょっといいかしら」
「何よ」
むっとした顔で皆にも言う。

「これから帰るんだけれど」
「ちょっとあんたに会いたい人がいるのよ」
「実はね」
　またしても何気なくを装って彼女に話していくのだった。
「それでちょっと来てもらいたいんだけれど」
「いいかしら」
「嫌よ」
　ところが当の美奈は憮然とした顔でそれを拒むのだった。
「今一人でいたいから。明日にして」
「いや、あんたはそうかも知れないけれどね」
「向こうには向こうの事情があるのよ。わかる？」
「そうそう」
　それが他ならぬ自分達のことであるのは内緒である。
「だからね。来て欲しいのよ」
「ちょっとでいいからね」
「ちょっとでいいの？」
　ちょっとと言われると機嫌を少しだけなおしたようであった。
「それでいいのならね」
「あっ、来てくれるのね」
「よかった」
　女組は彼女が来てくれそうな気配を見せたのでまずは内心ほっとしたのだった。
「よかった。じゃあこっち来て」
「屋上にね」
「屋上に？」
「そうなのよ、そこで待ってるのよ」
「そこでね」
　こう話すのだった。
「だから。ちょっとだけ来てね」
「いいわね」

「何か怖い先輩が待ってるとかそういうのじゃないみたいね」
皆の目を見て言うのだった。皆とりあえず焦っている目はしているが悪いことを考えているような後ろめたい目でないのはわかったのだ。
「だったらいいわ」
「そもそもそんなのだったら無理矢理連れていかない？」
「ねえ」
皆自分達の目を見られたのでそれが怖くもあった。
「っていうか私達そんなことしないし」
「協力もしないし」
そういう悪い面々ではないのである。根は善良なのだ。だからこそこの二人の剣呑でかつ殺気に満ちたいがみ合いを何とかしようとしているのである。

第六章

「だから。信じていいから」
「騙されたと思って来てみて」
実際に騙すつもりではあるがそれは内緒だ。
「早くね、屋上にね」
「こっちよ」
こうして美奈の手を引くようにして何とか屋上に誘い入れた。そうしてその時に調度良美も下駄箱でクラスの男組に囲まれそのうえで誘われていたのだった。
「なあ、だからな」
「早く屋上に行こうぜ」
こう彼に対して言っていた。
「そこで待ってる奴いるからよ」
「なあ」
「気分悪いんだけれどよ」
彼もまた不機嫌そのものの顔であった。
「だから早く帰りたいんだけれどな」
「そこはそう言わないでな」
「ちょっとだけでいいから」
「だから来てくれって」
彼等も彼等で必死に言っていた。
「ちょっとだけでいいから」
「屋上にな」
「ちょっとだけなんだな」
むっとした顔のままだったがそれでも反応を見せてきてはいた。
「ちょっとだけでいいんだな」
「ああ、そうだよ」
「ほんのちょっとだけな」

彼等もまた焦っている顔で良美を誘っていた。
「行こうな。いいな」
「少しだけな」
「わかったよ」
良美は仕方ないな、といった顔で応えるのだった。こうして彼も何とか屋上に向かうことになった。屋上に向かいながら男組の一人がそっと携帯を取り出しメールを打つのだった。そうして返信を見て満足そうに頷くのだった。
「よし、これでいいな」
そうして良美に気付かれないようにして携帯を収める。そのうえで彼を屋上に案内する。彼が屋上に入ると彼等は自分達はそそくさとその場を後にするのだった。
「あれっ！？あいつ等」
何処に行ったと思って周囲を見回す。しかしそこには彼等はいなかった。
だがそこには一人いた。それは。
「何で御前がここにいるんだよ」
「それはこっちの台詞よ」
そこにいたのは美奈だった。二人は顔を見合わせると早速言い争いをはじめた。
「何であんたがここにいるのよ」
「そうか」
「そうだったのね」
そして二人は同時に気付いたのだった。
「あいつ等、それでか」
「それで私達を屋上に」
真相はわかった。しかしそれで話は終わりではなかった。それどころか激化してしまった。
「全くよ。大きなお世話だよ」
「そうよ、あんたなんかと一緒にいたくないわよ」

早速二人は本格的に言い争いをはじめたのだった。
「あの時あんた何言ったか覚えてるわね」
「それはこっちの台詞だ」
良美はむっとした顔で言い返す。
「御前あの時な」
「何よ、まだ言うの？」
「ああ、言ってやるよ」
完全に売り言葉に買い言葉だった。
「何度でもな。御前はあの時俺のクレープ取ったよな」
「一つ位いいじゃない」
美奈は居直ってきた。彼氏の顔を見上げて。
「一つだけよ、取ったの」
「最後の一つだったよな、その一つが」
「そんなのでガタガタ言わないの」
しかも居直るだけで済まなかった。
「あんただってこの前私が読んでた漫画勝手に借りたじゃない」
「後ですぐに返しただよ」
「読んだ後でストーリーまで言って」
「そんなの読んだらわかるだろうがよ」
「それを読むのが楽しみでしょ。違う？」
お世辞にもレベルが高いとは言えない言い争いは続いていく。
「あんたのせいでその楽しみがね」
「クレープ一個と比べたら安いだろうがよ」
「安いわけないでしょ」
こんな言い争いだった。しかし外からは聞こえない。皆屋上の扉の裏側でその話を聞いていた。しかしぎゃあぎゃあと五月蝿い彼等の言葉は聞こえてもその内容までは把握できなかった。要するに何を言っているのかまではわからなかったのである。
「何て言ってるんだろ」
「さあ」

皆話がわからず首を傾げていた。
「何か凄い勢いで言い争ってるのはわかるけれど」
「内容まではな」
「わからないわ」
そうなのだった。
「それにしても物凄い言い争いだけれど」
「こりゃ仲直りできないかもね」
「そうかもな」
もう話の内容は置いておいてそのうえでこのことを考え合うのだった。
「この有様じゃね。とても」
「仲直りどころじゃないかも」
「確かに」
一か八かだったがそれは失敗に終わるのではと思ったのだった。
「喧嘩激しくなってるし」
「破局かなあ」
「これはな」
遂には最悪の事態まで考えられるのだった。

第七章

「これだけもう言い争ってたら」
「どうしようもないかもね、本当に」
「参ったなあ」
皆その考えを頭の中に浮かべはじめて頭を抱えだした。
「こんなことになるなんて。どうしよう」
「どうしようって言われても。肝心の二人があれじゃ」
「もう終わり？」
「そうかも」
最悪の結末が急速に現実のものとなってきていた。
「参ったなあ。これじゃあ」
「まあ成功するとは思ってなかったけれどね」
「って今更言うなよ。実は俺もそう思ってたしよ」
「まさかこんなことになるなんて」
言い争いは続く。しかしその言い争いが急に終わった。皆二人の声が止まってまずは何事かと思った。
「えっ、声が」
「止まった！？」
「止まったわよね」
顔を見合わせて言い合うのだった。
「間違いなくね。止まったし」
「何で！？」
「何でだ！？」
そして今度は皆で目を点にさせるのだった。
「ここで急に話が止まるなんて」
「何事かしら」
「ちょっと。想像がつかないな」
あれこれと考えたがその理由がわからない。屋上の扉のすぐ側で

首を捻りはじめる。しかしそれでも誰もその理由がわからなかった。
「殺し合ったとかか？」
「馬鹿言いなさいよ」
それはすぐに否定された。
「そんな縁起でもない」
「幾ら何でもそこまではいかないだろ」
「それもそうか」
「大体。それなら最後に物凄い断末魔の声が聞こえてるよ」
こうした現実に予想される事態まで述べられて否定されたのだった。
「もうとっくにね」
「じゃあそれはないか」
「当たり前だろ。幾ら何でも」
「それじゃあ何かしら」
そうしてあらためてどうして静かになってしまったのか考えられるのだった。
「急に静かになったのは」
「何か屋上であったのは間違いないけれど」
そうでなくては静かになる筈がない。これはわかる。
「まさか宇宙人にさらわれたとか？」
「宇宙人！？」
「何だそりゃ」
皆女組の一人の言葉に眉を顰めさせた。
「ほら、よくあるリトルグレイに拉致されて」
「あんたそれ矢追さんの番組の観過ぎ」
「あれインチキなんだよ」
このこともすぐに否定された。
「っていうか何処をどうやったらあんな話が信じられるのよ」
「滅茶苦茶な話垂れ流してばっかりだろうがよ」
「あれ嘘だったの？」

彼女にとってはその方が驚きのようである。
「ひょっとして」
「ひょっとしてもしなくてもそうだから」
「嘘に決まってるだろ」
「そうだったの」
これでこの話は終わりだった。
「あれ嘘だったの」
「よく観なさいよ、おかしなところ一杯ある番組だから」
「他にもキバヤシだのそういうのは嘘というか電波だからな」
ついでにそちらも否定された。こうして宇宙人の拉致も否定された。しかしだからといってどうして静かになったのかはまだ誰にもわからなかった。
「何かあったのは間違いないんだけれどな」
「本当に大丈夫かしら」
皆今度は次第に不安になって心配になってきた。
「何かあったのかも、冗談抜きで」
「じゃあ見てみるか？そっと」
「そうね」
とりあえずは中を覗いて様子を見よう、そうした意見になってきたのだった。
そうしてそっと中を覗いてみると。何故か二人はいなかった。とりあえず扉の隙間からは彼等の姿は何も見えなかった。制服の端一つも。
「あれっ！？」
「いない！？」
「そうよね」
皆まずはそのことに目が点になってしまったのだった。
「これってどういうこと！？」
「何があったの！？」
「さあ」

皆それが何故かわからない。しかしいないのは確かだった。彼等は確かにいないのだった。
「どうしたんだろ」
「まさかと思うけれど」
女子の一人がここまた不吉な顔で言うのだった。
「飛び降りとか！？」
「だからそれから離れろっての」
そしてまたこのことが否定される。
「それだったら今時下の方が大騒ぎになってるだろ」
「そうよ。静まり返るどころじゃないでしょ」
女子の間からもそれが否定される。
「だからそれはないっての」
「絶対にね」
「じゃあ何故かしら」
そしてまたこの静まり返ってそのうえで姿が見えないことが話されるのだった。
「どうして二人がいないのよ」
「一応見てみる？」
ここで別の女子が怪訝な顔で言ってきた。
「何処にいるのか。見てみる？」
「そうだよな。常識で考えればあれだよ」
男子の一人が常識に立ち返って話してきた。
「二人はあそこにいるよ」
「あそこって？」
「屋上にな」
そこにいるというのだった。
「絶対にな。だって出入り口はここしかないんだぜ」
「まあそうだよな」
「それはな」
他の男子達がその言葉に対して頷く。

「ここしかないのは確かだな」
「他の校舎になんて」
このことも一応考えられていく。年を入れて考える為にだ。

第八章

「何メートルもジャンプしないと無理だし」
「そんなのできたらオリンピックに出られるわよ」
「余裕で金メダルよね」
女子達がここでまた話す。
「そんなのできたらそれこそね」
「しかも二人共それなんて」
考えれば考える程有り得ないことだった。そこまで行けば最早忍者漫画かかなり過激な格闘野球漫画か少林の少女の映画である。それか特撮だ。
「絶対に有り得ないし」
「じゃあ屋上にいるのは間違いないわね」
「そうね」
あらためてこのことが話され確認されるのだった。
「絶対にね」
「じゃあ探す？」
女子の一人がここで言った。
「二人。屋上の何処にいるか」
「ああ、それには及ばないだろうな」
「そうだよな」
しかしそれは男子の数人によって否決された。一瞬にして。
「どっちみち出入り口はここしかないんだぜ」
「じゃあここに来るってことね」
「絶対にな」
出入り口が一つしかない以上それは確実だった。若しここを使わないのならそれこそ校舎を飛び移るか縄か何かで降りるかだ。どちらにしろかなり非現実的である。
「それじゃあここで待ってるのね」

「そうすれば絶対に来るから」
「ああ、そうしようぜ」
男子達は女子達に告げた。
「ここはじっくりとな」
「待ってな」
「わかったわ」
女子も賛成してこうして皆とりあえずは待つことにした。そうして暫くの間待っているとだった。不意にその出入り口の扉に誰かが近付く気配がしたのだった。
「来たぜ」
「そうね」
皆すぐにわかった。そうしてすぐにすぐ側の物陰に隠れた。そのうえで彼等が来るのを見守る。やがてそのメインイベンター達が来たのだった。
「って！？」
「えっ！？」
物陰に鮨詰めになって隠れている彼等はまず驚きの言葉を出しそうになったところで止めてしまった。本当に危うく出すところだった。
「何で！？」
「ってどうしてなのよ」
何と二人はお互いの顔を見てにこにことしていたのだ。一時間程前のあの今にも戦争になりそうな剣呑な気配は完全に消えてしまって。
「何であんなに仲いいのよ」
「腕なんか絡み合わせて」
実際にそうしていうのだった。いちゃいちゃしていると言っても過言ではない。
「これってどうしてかな」
「さあ」

皆首を傾げるばかりだったがそれでもわからない。
「天変地異でも起こったか」
「それとも何かあったか」
「まあもっともあれがあの二人の正常な状態だけれどね」
言ってしまえばそれまでである。実は二人の関係は本来はそうなのだ。しかし今日のあのどうしようもない魔闘気か瘴気を思わせる物凄い負のオーラを見てはだった。信じられないことだった。
「けれどな。あれって」
「何なんだろう？」
そんな二人を見てもわからないものはわからない。それで考えているとだった。
その二人が話しだしたのだった。これまた実にいちゃいちゃとした様子でであった。
「もう、凄いんだから」
「美奈こそな」
そのいちゃいちゃとした様子でにこにこと話している二人だった。
「あんなことあんな場所でするなんて」
「けれど誰も見ていないからいいじゃないか」
「そうね」
こんな話をする二人だった。皆それを物陰から聞いていてまた言うのだった。
「これってまさかね」
「そうよね、あれね」
この『あれ』という言葉でもうわかるのだった。そこにいた全員が。
「あれやったわね」
「間違いなくね」
皆また二人を見ながら言い合う。
「あれは絶対に」
「何ていうか。野獣じゃあるまいし」

「けれど何でなんだ？」
ここで男の一人が腕を組んだうえでいぶかしんで言うのだった。
「さっきまであんなに仲が悪かったのに急にな」
「だからあれでしょ？」
しかしここで女子の一人が言ってきた。
「喧嘩する程ってやつよ。だからあそこまで喧嘩したのよ」
「そうか？」
「それか？」
しかし皆その言葉には今一つ、いや今二つか三つは納得できない顔でいぶかしむのだった。
「っていうかあんなに仲が悪かっただろ？」
「それで急に仲が戻るって何なんだよ」
「しかも屋上でしたよね」
「そうそう」
このことも話される。
「それはどうしてなのかしら」
「喧嘩していたのは何よ」
「あれよ。お互い言いたいこと全部言い切ったからよ」
さっき話したその女子がここでまた言うのだった。
「それでお互いすっきりしたのよ。言いたいことを全部言ってね」
「それで仲が戻ったのね」
「そうだと思うわ。時と場合によっては言いたいことをそれぞれ言い切る」
こうしたやり方があるのも事実だった。人間の仲、それも恋人同士ともなると一筋縄ではいかない。そこには何かと複雑なものがあるものである。
「そうしたら落ち着いてもやもやしたのも消えたんでしょうね」
「それでなのね」
「ええ、そういうことだと思うわ」
彼女はまた語る。

「まあ原因が何かは知らないけれど」
「とりあえず言いたいことは言い終えたからなのね」
「だから仲直りできたの」
「でしょうね。まあ仲直りして何よりよ」
「そうね、それはね」
「確かにね」
皆このことは素直に喜ぶことができた。まずはそれは間違いなかったからだ。
「じゃあ明日からは平和な学園生活の復活ね」
「何はともあれな」
「さて、それじゃあ明日は」
皆ほっとした顔になって笑顔で言い合うのだった。
「楽しい学園生活を楽しみましょう」
「皆でね」
こう言い合って屋上へと向かう階段を逆に降りて普段の校舎に戻るのだった。何はともあれ二人は仲直りして穏やかな生活が戻ったのであった。

喧嘩　　完

２００９・５・１１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0595h/

喧嘩

2010年10月8日15時51分発行